

させる形で、震災における「公共性」の有り様が、考察される。そこで手がかりとされるのが、「絆」や「緩やかなつながり」という、東日本大震災後の日本において広く流通したキーワードである。強固な同質性を要求する「絆」と、各自の異なる志向関心へと分解しかねない「緩やかなつながり」。その二極の間にあるものこそが、「本書で「公共性」という名で追い求めてきた関係性」(p. 261)なのだと、著者はいう。そして、『震災の公共人類学』は、こうした関係性を描き出すと同時に、関係性の一部を目指すものである」(p. 262)と述べる。

本書の特徴は、その極めて抑制的な筆致である。著者は、事例の描写と説明に徹して、いたづらに論を踊らせない。結果として、トルコの震災をめぐる入り組んだ関係性としての「公共性」を多面的に描き出すことには成功しているが、そこからさらに一歩踏み出して公共性という概念をめぐる問題系を開拓していこうという力強さには、欠けるかもしれない(たとえば、「はじめに」で公共性に関する3つの関心を提示しながら、結論部ではそれに呼応した論の展開と整理がみられない)。ただしそれは、各章を「一つのテーマをめぐるストーリーとして読めるように心がけた」(p. 12)という記述からも分かるように、著者が意図的に選択した態度である。その選択は、トルコにおける〈地震と地震の間〉を描こうとしている最中に、期せずして東日本大震災に直面したことと、無縁ではあるまい。敢えて慎重に抑制的に書かれた本書は、著者による「震災の公共人類学」の総括

ではなく、その序章に当たるものだと、捉えるべきであろう。深甚なる可能性を秘めた著者の取り組みの、今後の展開に期待したい。

田村慶子.『多民族国家シンガポールの政治と言語―「消滅」した南洋大学の25年』明石書店, 2013年, 208 p.

鍋倉 聡*

本書は、シンガポールにかつて存在した南洋大学(南大)について、その歴史を中心に行なった研究の成果をまとめたものである。南大は、1956年に当地の華語教育の最高学府として開学した大学で、1980年に「消滅」し、その敷地は現在、南洋理工大学という別の大学になっている。

シンガポールは、リー・クアンユー初代首相率いる人民行動党(PAP)の下で一元管理社会が築かれて久しく、その歴史については、リーが自身の著作や演説等で繰り返すような史観が支配的である。本書は、南大について、「先行研究」、「当時の華字新聞と英字新聞、南大同窓会の記念誌や回顧録」、「公文書や関係者のインタビュー資料」といった史資料をもとに研究を進め、こうした史観を再検討する試みだといえる。

本書の内容を以下に記すと、まずその目的は、「はじめに」で示されているとおり、南大の歴史を「政治と言語の葛藤という視点から振り返ること」である。これまで十分に研究が行なわれてこなかった南大について、さ

* 滋賀大学経済学部

まざまな史資料をもとに研究を行ない、「華語派華人が英語派との抗争の末に社会の周縁に追いやられていく過程であり、権力の側から見れば、多民族多言語の社会において民族の言語や文化をどのように政治的に管理するのかという政治と言語の葛藤の歴史と捉えて分析」することが試みられている。南大の事例はまた、シンガポールだけでなく、「多民族多言語社会においてどの言語を公用語や国語とし、多様な文化をどのように管理するのかという」「多くの国家が抱える課題」を解決するにあたって、重要な事例を示すものとして研究が進められている。

第一章では、南大が開学する1956年3月までが取り上げられ、植民地時代のシンガポールの華人と華語学校（華校）をめぐる状況の下に、南大の開学が位置付けられる。華校は、小学校ですら政府の支援を十分に受けられず、政府から距離をとり、華人有力者の支援によって運営された。こうした特徴は、南大に通じるものである。華人は一枚岩でなく、英語学校（英校）で教育を受けた英語派と華校で教育を受けた華語派に分かれていた。戦後、中華人民共和国の成立等により華校をめぐる状況がさらに悪化する中、1953年1月に、華人有力者のタン・ラークサイ（以下の人名表記は全て本書に従う）によって、華語大学設立構想が発表された。大学設立に向けて、人力車夫たちが寄付を集めて走り回るなど華人社会の熱気が高まる中、南大は華校以来の政府との距離もあり、その最初から「権力に祝福されない大学」であり、開学式典の日が「もっとも輝く日」であった。

第二章では、開学後の南大の困難が記される。困難は、財政難と学位承認の問題のほか、一番大きかったのは、1959年の政権交代でPAP政府が成立する前と後の二つの異なった委員会による、報告書の内容とその公表であった。他方、こうした困難な中、設備も不十分な環境で、学生たちが自分たちで助け合い熱心に学び合う様子が記されている。

第三章では、シンガポールが1963年にマレーシア連邦の一州に加わる形で独立し、1965年に分離してシンガポール共和国成立に至る中、南大とPAP政府の対立が激化し、ついにはタン・ラークサイ南大理事長の市民権が剥奪されるなど南大がさらに追いつめられていく様が描かれる。南大にとって致命的だったのは、華僑華人研究で著名なワン・グンウーが委員長を務めた委員会の報告書であった。本章では、報告書に対する学生たちの激しい反発の様子が描かれている。

第四章では、1980年に南大が消滅に至るまでの過程が記される。それは、シンガポール大学と合併しシンガポール国立大学が設立するという形で行なわれた。南大最後の卒業式が挙行された直後に、キャンパスの取り壊しが始められたことが、その消滅を象徴する具体的な描写として描かれている。

第五章では、南大が消滅に向かう一方、シンガポールでは1979年以降、華語普及運動が行なわれ、華語が一転してPAP政府によって促進されるようになった変化が記される。1990年代以降は、南大の復権に向けた動きが、シンガポール国外の卒業生によって活発になった。かつての助け合いは、南大消滅後

も世界各地に息づいていたのである。こうした中、PAP 政府は、南洋理工大学を南洋大学に改称する「復名」を認めない一方、「アジアの価値」を受け継ぐべく「南大精神」については、その重要性を強調するようになって現在に至っている。

本書の意義をここでまずひとつ挙げると、関係するさまざまな史資料を用いて南大について検討し直し、リー初代首相を頂点とするシンガポールで支配的な史観の下にある南大の位置付けから距離をとり、こうした史観を再検討することを試みたことである。

シンガポールでは、評者の理解によると、華人中心主義やマレー人中心主義、そして共産主義に打ち勝ったことが、その繁栄を築く礎となったといった史観が支配的である。華人中心主義やマレー人中心主義は、ショービニズムやコミュニズムとされ、コミュニズムの共産主義やさらにはコロニアリズムの植民地主義とともに、諸々の「C…ism」に打ち勝ったという、明快で分かりやすい図式が導き出される。こうしたシンプルな図式は、シンガポールの人々に半ば無意識のうちに刷り込まれており、シンガポール研究者の多くも例外でない。そこで南大は、華人中心主義や共産主義を育んだ、問題の多い大学と位置付けられやすい。

これに対して本書は、さまざまな史資料を用いて研究を進めることで、こうした図式に対する反証を試みている。本書のように具体的に興味深い事例について、丁寧で細かい描写を積み重ねていくことは、支配的な図式から脱却していくにあたって有効であろう。

他方、細かいことかもしれないが、シンガポール研究において細かいことが重要であることを鑑み、その用語法について二つの点を指摘しておきたい。一点目は「メルティング・ポット」である。本書では、「華人、マレー人、インド人などそれぞれの民族がそれぞれのアイデンティティを保持しつつ、国家と社会の発展に寄与する」ことを『メルティング・ポット』的な国民統合』としている。しかし、メルティング・ポットは本来、文字どおり、複数の金属を溶け合わせて合金をつくる「るつぽ」を意味し、シンガポールに当てはめると、華人、マレー人、インド人等を融合してシンガポール人をつくり上げることになる。本書のような意味で用いるのであれば、相応の説明が必要だったかもしれない。

二点目は、英語の「race」と、それを訳した華語の「種族（种族）」の引用についてである。本書では、原文を直接引用するにあたって、「民族」と訳されることが多いようだが、「race」はあくまで「人種」である。シンガポールでは、国民（nation）の間の差異を表わす用語として「race」が広く用いられる中、その是非はともかく当人の発言や原文を直接引用するにあたっては、民族が nation も意味することを鑑みれば、原文が分かるようにするといった何らかの処置が必要であろう。

本書の意義は、こうした些末な点よりもむしろ、これからさらにシンガポールをもとに研究を進めていくにあたって、興味深い点を多く示していることにある。

一つ目は、華語をなくすのか強化するのか、両者のせめぎ合いである。華語をなくそうとするだけだったら、国家権力による言語抑圧の一事例に過ぎない。それがシンガポールでは、1970年代後半以降、政府が華語を促進しているのである。華語に代表される華人性の強化と弱化の同時進行は、国家との関係でエスニシティ研究を進めていくにあたって非常に興味深い。

二つ目は、多言語社会における華語の位置付けである。本書では専ら英語との対比で華語を捉えているが、多言語社会であるシンガポールでは、華語と英語のほか、マレー語、福建語や広東語といった華語諸語（いわゆる華語方言）、タミル語をはじめとするインド諸語といったさまざまな言語が用いられている。こうした中に、華語を位置付けるとどうなるのであろうか。華語は、支配的な言語である英語に対して自分たちの弱い立場を主張する言語となる一方、華語諸語に対しては、自分たちの言語を抑圧する、支配的・抑圧的な言語となり得る。また国語であるマレー語とはどのような関係だったのであろうか。華語は、英語以外の言語との関係も重要であり、華人以外の人々の主張も重要である。英語と二項対立的に対比するだけでなく、他の言語との関係を複合的に位置付けるといった研究が、華語の微妙な立ち位置を明らかにするにあたって、今後求められるであろう。

三つ目は、南大を最終的に消滅させたリー初代首相の言動である。その時々状況によって実によく変化していることが、本書から改めてよく分かる。若手弁護士だった反植

民地時代には華校学生を弁護し、1959年に権力を握るやマレーシア連邦成立に向けてマレー語を促進し、1965年に分離独立するや英語を重視し始める。それがまた1970年代後半以降は、一転して華語重視も唱えるのである。このような一貫性が、実は政治支配を続けるのには有効なのではないかとすら思わせる。こうした中、研究者にとって重要なのは、その中に一貫性を見つけ出してその支配を正当化するのではなく、本書のように、その変容を記録し記述していくことであろう。

日本でもこれから一層、政治権力側の主導で大学再編が進められるかもしれない中、南大の事例は示唆に富む。外部報告書の評価を駆使しそれを積み重ねていくことで廃校に追いこまれた南大の事例が、政治権力側の大学再編のマニュアルのようなものにならないことを願いたい。

本書は、シンガポールにとどまらない重要な課題を示しており、こうした課題に応じていくにあたっては、シンガポールの現代史、とくに本書のように1950年代以降の出来事について細かく取り上げ、精緻な研究を積み重ねていくことが重要である。こうした研究を今後進めていくうえで、本書は重要な意義をもつ一冊であるといえよう。